契情買翁孔雀

へ13
3620
6

へ13
號 2620
巻 6

小野文庫

奚情實豹之巻第六

高見ふて良ら荒る。猿兎死して乾物
高ふる。欲国滅して保ふ亡び。己韓信が名
初の一名冥かうか。さしもの強き平氏の
一類。悉く西海の底に沉む果。源氏一統
の代となる。全く源九郎大夫判官義経
この武功によりてなり。今見た平の教盛。
モ多くの国々に生ずる。今牙義経の武
略幻孫によりて。一天下を掌握ふる。
市果紙の狂ふ。平氏の一族
亡び果。四国西国結ふ。近百屋鴻の大
臣ふ生捕の事とやつれ。
判官ふ西ふ下向あると。関八州の法名。

恵びの出行みて万策と祝ーかへ和ゑは機嫌信
うるおく色彩ぐ武徳はわどとのく一念と燃ん。
戦功をえげまされしゆへぞとぴ爲とトされし浅ふ
恵びの出酒宴まして梶原平三景時さも結構なる
酒盃ぴ易の行の作り物よ虎の背ふ狐の姿し
神とまらへ自分出まおおてお我君の武徳と七四海
悉く治ぴ源氏の繁昌多の繁情一時よひけ平三景
の恩賞と爲うぴ。さい蓋しは恢をあぶき。景時が
恐ぐ畏すす志の出行紙と持とまるとぴおいるをーや
さぴ。大変れる出後みて地ぴ古者ら治平いぴ鎮ら感
れ行解とぬちんどとぴるて祝をつぴ。虎の背ふ
狐のまさるつてのる神い名ぴ。ぴ名えい景時が心
みての治平と宣えゆれいぴ。紅とヤ上ぴとの出後ぴ。
梶原平三ぴ今平三景時亡と天下治ぴて祝ら恢追付

入れ世の及ぶ人ん。乱い社ひよて考く狐い虎の
威と藉とヤ。若ふ者ふ。ぴ人のごとく平三景亡ぴて。
仇今牙力ぴ考利友友の出形勢とんヤあ出ぴる日来
の威勢ぴ百倍ぴ。ぴ亡ぴ我勢ぴ深
武略の功ふよてうと。自分ぴ為みて。ぴ土を土
茶のごとくんぴ。考へ。ぴうぴひまく。平三納ぴの
聟ぴ出とーのぴられ。結婚とあまぴ抱られぴのまい
奔ぴと格ぴれ。日我国中とぴるぴ。ぴれぴ出ぴ法
平三勢も誠ぴ大今い考ぴ名ぴの中ぴいひぴ。ぴ敬
ぴらく事情ぴ。ぴ我君とうぴ海ぴ。ぴ出ぴ我ぴ。
出ぴ法ぴ出ぴの。ぴ遠とぴいぴれい君の出代友
とてぴ勢ぴ持ぴ。ぴれい法勢の合力ぴよぴく
猪家ぴの。ぴ利友友一分の功ぴ自称ぴ。ぴ士
も威ぴおぴれてぴ人ぴ未考ぴの。ぴ和とわぴ。

ひとへに虎狼の威とかうして。ものみけだものにおそれさせ
ゆるゆるはたらつとなをさせ給よいとぎく。ゆゆかしておりや
ものとといたいひ〳〵くぞの中代を刺客及追付らぐ
ひとれをりんりてれ月公のうちに虎狼の威とかる留と
治高いはつひ助と仕ひとぞ。怪るをくやとれば軽弱
中を張よ義経まを家と攻ものと好。勲功よかこう。
東国の武士とおのしがの家人のぞくわらい。まるの雅
こうはまうすといふ時とまうす。伊とかぐ九郎い信頼
を記とぐさ平ねよい人結ぬなどやん及ばれ事
あぐ公をのくや中ものされしとなをれた。大石い福を
おりんじいふいとを怪うぞはをおさず庄平ものをちづめ。
あぐ公中いあ出して。義経と梶原及く口論よ及。
はよ猪俣といふ領張のぞいつさ。ぞ怪とくこわる
高。刺客の月れとを事にふれ後をすると中ーが。

今日いと出てあさ面いやよるぞ。こそ乱世をまくく
侵害とぞひるづも注おて一ものいふ人臣。者勢ろ
ぞまて伝ろうい。義経ぐ四屋人合えぬ四い。事多ぐぬ
くくいい入ぐとと。則ふ子嵐ぬふ治とを白しぞ。色い後越
村ま関とすて。事ぬのは猪太と信れぞ。刺客を吹く強
金の中へ入れまど伝付れ。ぞ色ぶぞふ治よ。を乗て
四ぬを三ぞれば。信人名同じ。れいを知りて追あ
ありしぐづれも梶原をあくこうとぬざる者い人ものう
ぞくう。武ぬ高ぐ世房ぐのや新里和次のふ市が
方命りぞ。高和ぞ出てるさぬ。長ぞ者上下先に白小袖。
ふに百八の珠数とは。然やきる風れた。涙ぐて
出ぞれば梶原ぞ人て。肝をつぶ。ぞ始め新れぞ者毎て
も驚れりあぐつぞ中ものぞれ。ぐのやるぐざと
ものぐひ今才和次のふ市ぞ今度西海を海平の

無の人々おいて。時つぎの家の的と射おとし。ろこのかま
主君の出称美人の美と。世の人の美と。世の人の美と。
尾よく出目人おかの。毎の伝び一おのいきみ。ついまで
肩のいきるべきけ。ひとよ。毎や与市の動面
うけ。宇る。ある。ひ。ある。れ。訳と。ある。始まあ。ず。訳。又牙
の困もけ。と。ひ。と。動。ま。と。か。ふ。ひ。い。出。て。無。与市の
おいて。自害。て。と。ま。ひ。き。い。ま。ふ。人。た。会。実の
他名と。て。ひ。ん。ひ。ひ。ば。ひ。い。ま。か。ま。ひ。れ。ふ。ま。の
あ。ま。と。探。ま。ば。ま。ま。会。ば。い。き。の。び。ゆ。ま。ま。ひ。
い。ば。ま。に。家。ば。ま。ま。ま

金鍬とおぼしき物にて打ちぬいたる穴の内より
長々しき方へ行人の妻いたと云ふものと思ひて
えぬきの矢をつがひ中人はなれたる所にて
うんとさしたるに世間ざつのやはりとおぼしくて
きこえたるに後ろ人の仕わざなるべし金鍬にて打
てもはたんとは抜かぬ物なれば無いの男とは後ろ
する人なりとおぼしきものいふ言葉やはり中世の
ものにて我身つかれてそ人のつきとられとせぶそれは
てはなのとおぼしき所へ伊氏一統の世代ぬけ
身はとおぼしき所へそれは初めてなりし栄記
いにしへの物がたりにて力ある武士の物語武勇
すぐれたる人にて一命をかけてあまたとたゝかふ。
英雄の戦功にて是ごの物語れば才ごのあれば
料理とおぼしき所にて脇ばとりて結構の英

雄とおぼしきひとり大功ある義経はいで男子
とおぼしきものにてもあるべきぞと思ふまゝ
ふてけいとうすけつきとおぼしきさしも罪
なきはり友の世界のことをぬぐと後世まで
別義物語後世人のかぶりとおぼしてあるべき
蛸とは毒虫ばいなる物語人別
の大小長者合くあるべきかなはずげらくと今
ほんとうの中にその後世ものがたりの耳へ入れるものは
ゆえなくとられていぬる我をつかまつる長
してゆきずばいあるとうらそ尼になれの無の
絵板よりけつとうてうかうそうふ世ばけ
て我身にはあるべき世界後世つのあるとや
きばさでも我とわしきはいん義経の世界は
ゆえしらずそうそうのばくけふそうそうん今ち

中おいて貴賤に行はれ、利害は大國二ケ所をぜ
らるゆゑに世を乱るされ。利害はと始め佐大名の時の
ふとゆゑにて治られ。されどもあるていにつく尽わ果る。
子孫のみ子孫にあつ。後名とあれば名とされ
と流さてが教化とん。そして勢力ある。第時実ざて
世をいて乱るとの中に世に居無をまき
まぬ乱ありてもかけまた。是形よ及ぬ仕合是後名の
恨わくいや乱た。それけいるに知ても後作やいい
かぐしぶんて自害するるもれ事にて我が居無い
ぶれるんぶ中とあるていいひとと一物ある汚の
場。女房ふれ。実母の中に親にそあるとあ
わかるひめ。二世とまるるづられぶとあて
へぶんの仕合をいぶ。是をひてもあるんと。
家力とれるて。人自殺せんとするとれるんふば
きとも死ぬるとあるゆ仕合にあるいてきる。
我全く義理をあくまるるとあ。是あるて後名
するあるず。ゆるるのにおいて後大名の中にて
後名いふ。第時が武家のみぶざと後代の後代の
と。無名と知合点。そ家知れ乱れ。今縁
なぬ知のるれ。第時位の武義の者が後れぶて。
家名も絶されど。貴国とられれ全弟をあくて。
るるるも入れぶ。世知あるべきぶ後名中に
ひ桃系とひそるにて。義理が武略知謀中く
元人のるぶきものよあねぶつのよい世と棄べき
ものとあいぶ今を廃努撥する府。ぶ弟の因を
切て知国ぶそ上て行ぶとつ臣。孫とくらぶ孫乃
無て部んとあ死ぶ。国おさる最なれば後後
ぶて義理が力のことぶ後大名重ねるる協て。

あさ夷に後ゝ人なし。我汝が後を仕ぐべし。剥皮と羅ふ
義ぐんぴるの人れぐ牧むぞよの出後にてよりて西名
と云合ふてそ。主君のあ後信とそれうと。名を折
あけ後なしぐんぴるのあ始てもとは。者かを主の勇代に
ふて死をる者下もあれいぐんぴるいひぐ。さうとい
ば勇に知ていは組後のは者をとぐ。ぐけてをはい。
ぐのつも数川をあてぐ。その人にと耳をぐ。ぐ
第二 生捕改関所を過ちのく鞍が俤名み
人名の巻表に紀ら縄のおとし。平家の一族栄耀み
かう。富士を絶しもさぐ。ぐ雲にひくく。ぐ平の
主秋に人果ぬ夏の紀ち。数い白ぬの上に付し。或い
波の底に沉く果れ中に四大信を豊ぐ海屋
ふ沉も果ぬぐ。ぐ捕ふ。ぐれ義里の国主と
ぬ人ぐ。ぐ人とふる夏の止ぐ。須や神ふ。そん。

かって新家にあの四府に。ぐ。ぐ。ぐ

いろはは浪なるぞ。隅八別のうたなどのもおもしろ面白と新あう
一世の祝儀かくごいでぞいるぞと和のかたよりひとく
くは実はとはせのいぶ茶を昭わ伝ふ弟銀井戸屋
いせ屋の無井戸屋なるぞ。そ繁とかへそ性。横糸手
三わが親ふいもてめでぎ多つ人さこられて表とあるへ
ふ人なるぞとでく和はて伝てゆらぎや秋くあるへ指
糸て横糸わが首ふなぎ。げ表の古船屋とすぎゃさん
と才とかんで二間よりさるれ。新家も出家ふうせあひぶみ
伝ふ知ておなとん表ぞのるを本名家仲を追すせてろ
ふ才人々年のるを聴ふ伝ふ山と家とてふの府ふ湯く
ふ海とた国波の雅と表のぞ平家の金欲とふとぐく
打ー。ぞ特の神家おとゆるく和ふもしふ家ゆるふ
表家表伝ふとはとして多くのるのとは捕ぞ
くぶしふて。家の射面にも及ぶいぶ国るまぞい

ぶ通ふ浪なりとい表線ふ面白と失いせんとの伝
来ゆるゆふいるを表ぶれ花ぶ日本西中とるぶむ
るるるいぶ利表ぶ平るゆるゆるぶ表ふれい。
才も知ふふ人表利のるふおるふ背肉ふ胞の見手
ちて射面するふ伝の船ふれふる良。イデ山笑と踊板
て見伝表ふ射面ー。ぶ良ぶ伝伝の品とふ利ふ人ふく
づけふふ出るふとぶ表伝ぶとふるゆ。ぶふい
おき西周情ぶ国板て入ふるふんいのふふて安ふ。
利ふ人利ふふ利ふ果ぶ伝ふとふふ。表ふて山ぶれ
もはきのるふれい歌利ふふふ良ふ。表ふ
表良ふいぶび表一筋ふけふふ世ふ伝ふふ伝
るのぶ。表ふぶ山表ふの表ふ全ふふふて表の伝ふふ
より出ふふふふふふふふ。横糸手ぶふふ表ふ伝
いふふるふふふふ良。好ふ後ふ人

九位大名も嘉例ごとの事ゆえ、ひとえにぬくまざるものいな
くいづれも勢ひいきたてまつる。この時分、若きかたと
同じく朝さまつりとんとぶいなく、天もあくいなる。
座ふるもこれ、つくせ、ひとえに都にて相勤の法に倣て。
徳川の行ましこの奥、始法に倣て。
あ、親人の礼を尊ぶ。れば、私なきかたと一紙よ
ましてあらば、第一の大切の廉えをいてはおく
持帝にそ出返答ひとえに殊使よ出帰
ぶ礼ふ情ぶ、おくれ、ほくおもへ、考ふ、ふ。
写さ出返答ひとえ、ぶ、ふ、ふ、ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

地女の白粉を白粉とやらでくるとおなじ白粉ひと
人で男女のあいだをへだてるものは
まことにこれ一重の紙ばかりなり
の出来ぬこの紙なくば
りと女の恋はせぬ
恋をするまぶかはあげるたぐいの
あげやの人々は
て居ひざをたて踏ものの
き脛の白きをあらはす
所作俗衣も
を秘ものとおそれ
かりて人をまねる
を作業柄の大小
同全の中を作る

ほとんど我ぞ中の白粉
下さるべきやうさんといふ
さん恨なき人にいかそれ
せきまいておあどおくせ
あのいあしに作一向育
わたまやんぞ
しるるもしいぶ
返答おつりれ
れさん業でありぞ
るる人感ぬ
のみとれ
ぬるぷあ
それどいて
いやも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世遠くて屋敷の位ふ高ければ
富家夫婦をはじめ下くの男女にいたるまで
金人家台所神棚をまもれとあれば中也性らく
位牌棚をまもるべし
れ本堂なりとねぎすれ肌を脱ぎ裸むくよりは
忌縮面にて人の社参に落涙の袋八反
ぶけの八丈縞の羽織を着て大長刀を持
の大小を手にとりて三尊の中央に立
らの二つ珠数を持て
てやはりきの羽織を着て
を面世にいひて
大れ年にいひつぎ
位の位ぞ
の木物を義信にして

世界を怪くあされ
ちに出て
俄に下袴を
脱ぎ
仕度をし
まりて
もくとり上げて
の脂を俄に木貫
えんせいは
いそぎつ
ひなる小時もつ
行れ麦とよ
のひ中小性を
ぞ

11 322 68

ようくらいの字ひらがな書きますと例次へ書くのわかる様で。
今いまさきわかるぬ世の中にわれわれ男もでもみて
ごとくいろいろ天地人の間のつりあさるく事と敷きや
ほすと考えとよびてなるそけいろいわゆるそれとけとひとを
人々のさぶの中に敬をわかるひれれとついて人とさちの人一
度家をれいるゆしわかるひの数ゆ後月とをいやと
すもびとそれでいるのりかぶうゆ次へ書くいはこの月にわ
そびもぶ敬をもつてそれが色ものとぶびとしてきやわる。
物をいてかるのまさぶるの伝はいはもの和とぶ絵かぎ
ひとあくめでおひているものとおそれそもるのはより他へ
契約仕るおら伝後されぶ来るも出ると色の変ことて。
あげるの基あるは出るのりて伝ぶ。変人ひいますぶき
けいもいぶくぶかりつくて我とわいる